

第十九回純黄賞

ま え な か
作 品 前 中 映
え い

右に贈ることを決定した

令和四年七月

コスモス短歌会

第十九回純黄賞の選考経過

五十歳以上の会員で入会後五年以内の新人を対象とし、今年恒例により、二〇二一年の一月号から十二月号まで一年間のコスモス掲載作品から選考された。

まず選者団より1位から3位までの推薦を求め、高野、影山、桑原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福士、藤

野、風間、田中、橘、水上比、鈴木、原賀、水上美、大野、松尾の各氏より回答があり、被推薦者は7名であった。前中映56点、工藤亜希子28点、高山幸子14点、印出美由紀13点、永田恵美8点、内藤文子8点、石田信夫5点となり、五月十四日編集会で検討して、前中映氏への授賞を決定した。

感 想

前中 映



「生活感のない歌ばかりだなあ」と言われ
てしまいそうですが自分でもつくづくそう思
います。人づきあいをしないので家族親族友
人知人の歌が詠めない。仕事が特殊で職業詠
は作りにくい。趣味もない。社会や政治を詠
むのは苦手。だから身の周りの些細なことを
拾い上げたり思いや感情を掬い取ったりして
歌を詠むしかありません。それでも自分の実
感からは外れないようにということは決めて
詠んできたので、今回この賞をいただくこと

になり、そういう自分の実感に多少なりとも
共鳴して下さる方がいたのかと思うとうれし
くてなりません。ありがとうございます。

略 歴

一九六〇年 東京都江東区大島生まれ
二〇一五年 作歌開始

二〇一八年 コスモス短歌会入会
東京都江戸川区平井在住

第十九回 純黄賞選考資料抜粋

前中 映推薦

○着眼、詩の発見が巧み。同時に温かな人間味がある。どこか都会的なアンニュイを孕みながらも閉塞した現代を生きる誠実な壮年男性が彷彿とする。

○暮しの中にあるユーモアを見逃さない。会話を歌に組み込むのが巧だ。慣用句やミステリーの素材を生かす術がある。

○都会に生きる日々を陰翳深く詠んでいる。ふと目にした光景を印象深く詠むこともあれば、また時に怒りに駆られる自身の姿をこれでもかと詠むこともある。

○六十歳を迎えた男の生の哀歎を陰翳ゆたかに詠む。激しい面も見せるが、抑制のきいた淡彩の歌にも魅力がある。和語を多用した調べがやわらかい。

○広汎な知の集積が作品の背景

に感じられる。端正な詠風、透明な抒情質がこの作者の持ち味であろう。

○どの一首にも潜む孤愁の心が研磨した勾玉のようで、何気ない歌からも強い詩精神が伝わる。行く末を詠む時、独特のエネルギーを発して凄みがある。

○詩的な味わいを持つ日常詠は繊細で美しく少し知的で魅力的である。そして、歌の中へ読者を迎え入れてくれる優しさがあ

る。○日常の些事に目をとめて、詩に昇華する。時事も自分に引きつけて歌い、独自の切り口がある。ユーモアと温かな眼差しが魅力。

○日常のなかでふと立ち止まることがある。人生の外側にあるような小さな「ふと」。それをしっかりとすくいあげてことばにしている。

第十九回純黄賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦文は○印が一人分、推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を前のほうに掲載してある。

推薦作品抄

前中 映 (第十九回純黄賞)

遠い日の記憶の中の神の名を呼ぶやうに呼ぶ あすららねか
したしたと夜の川原に聞こえる人とはちがふものの足音
風かよふ外階段をのぼり来てあるとき罫子の高さを越えつ
ひまはりが西陽に揺れる駅前のそこだけがまだ終はらない夏
あみだくじ指にたどつてゆくやうにゆふべの路地をゆく荒木町
エタノール十指にふかくすりこんでほくらはなにを殺すのだから
人を怒りまた怒りそしてみづからを怒りて下る夜の神楽坂
ごめん今電車の中とささやいた男の会話がまだ終はらない
自販機のあかりに頬を近づけてほのかな暖を取る冬の夜
見ることのできない部位にある傷を冬の光にあたたためてをり
遠い昔と近い昔の生きものを分けゆく不燃ごみ可燃ごみ
グーグルの暦ひらけばあかあかと死んだひとにもある誕生日
さし示すために伸ばした指先が何度も春のひかりに触れる
六十年生きて選んだことがない退路を断つといふ選択肢
苦しめばうま味を増すといふ貝を夜の氷庫にゆつくり殺す
街川の淀みを不意に抜け出してペットボトルは海へと向かふ
働けなくなつたら飢えて死ぬだけの私の辞書に「老後」はあらず

工藤亜希子推薦

○聴覚、色彩感覚に鋭敏な作者である。ものや自然を見て得られた感動や思索から、命のありように目を向け、私とは何かを常に問いかけようとする姿勢が深い。

○微妙な心の動きを、幅広い詩的素材をふんだんに駆使しながら一首にまとめ上げる力量には注目すべきものがある。

○さみしさや悲しみなどに目を背けず、しかと向き合い美しく魅力的に詠む。比喩が優れているのはとさせられる。静かな世界観に惹かれる。

○繊細にしてリリカル。都会的で洗練された感性。新しい素材で意欲的に詠んでいて、斬新である。一方、遠方に住む老親を気遣う家族詠にも惹かれた。

○過去や未来の自分像と、共に生きていけるような質感から作者の心境が窺える。ロボホンも完全に生きものとして同居しているようだ。

○何気ない日常空間を詩的に捉え表現する力を持っている。自然詠が美しく、隠喩の用い方が巧みである。

○細やかな抒情が詠われていて美しい絵画のような作品である。情景が目につく。

○多岐にわたる素材を詠む中、思索的な作品や叙景歌のしつとりとした詩情が深みを増す。

高山幸子推薦

○農業に携わる暮らしの中から、健康的で力強いメッセージが伝わる。夫をはじめ家族への視線も温かで爽やか。病める時代にあつて貴重な作品を生み出す。

○住む地の自然とけあつた暮らしをされているのであろう。自然から受ける感動を常に新鮮にとらえ、大切に作歌している。温かな家族詠も魅力がある。

○自然や人物の観察が緻密・具体的で作歌の強みとなっている。暮しの中心に農作業があり、そこからの取材を忘れない。

○農業に従事している作者。農作業の実感を伴いながら、サバンの風を感じたり、空中へ仮想のダイブをしたり、おおらかな作風が魅力的である。

印出美由紀推薦

○この一年で表現が深まった。喚起力のある言葉の選択により

工藤亜希子*

寂しさの色は黄色と思う秋誰かの記憶のような公園
金色の鱗敷きつめ円錐の公孫樹並びぬ絵画館の道

G線上のアリアは金の曲線をゆるゆる描くわたしの中に
ハシビロコウ目隠し鬼の目隠しを取つたそこにいそいな感じ
あかとき外階段の靴音を聞く時冬は静かなうつつわ

冬空を離れて雪はみずからを送るごとく地上へ向かう
かぎろいの風吹く丘に残されて風の声聴く一人の春は
さみどりの草そよがせて春風が耳元過ぎるフルートの音

こめかみの静かな記憶 草笛を鳴らした春のさみしいところ
樹の内をめぐる樹液の楽しげな声聞こえしかもうすぐはつなつ
ひんやりと頬杖つけば雨音の容れものとなる私のからだ
ちちははが老いてそののち吾が老いる廊下で順番待つような夜

高山 幸子*

川底へとどく光を編むように石斑魚が泳ぐ行きつ戻りつ
鳩、雉から守り来し大豆秋の日にびちばちぶちん茨をとびだす

挽ぎとりの作業を終えし柿畑ににぎり飯食ふ風を馳走に
せせらぎを聞く心地よさ秋天を茨からしきりに胡麻がこぼる
柚子の香につつまれ一日ジャムつくくり心透きゆくトパーズ色に
五月ばれ空を映せる水張田のそらへ踏み入り早苗を植えん

「本日はルビー婚です」声張れば田植え機に乗り手が手を上ぐ
空映す水田に入るはスリリング空中ダイブの心地となりぬ
まつ毛ほどに育ちしメダカすいと行くくきくくねる子子かわし
まず風に乗る一本を張りしクモ一心不乱にたて糸わたす

印出美由紀

完璧な乗算として燕子花金の屏風に展かれてある

オフロード四輪駆動でゆくごとく胸処が撲たる嚙下のたびに
竹林の真冬の襷を分け入れれば歌つてみよと光降りくる

リアルな質感・量感が伝わる。日常に異空間を見ているような世界が魅力である。

○おそらくは自身にもはつきりと定めがたい思いを、短歌形式になんとか取めようとしている健闘ぶりが光る。

○古典にもよく通じて、興味の対象が広く、思索が深い。回を重ねるごとに角がとれて、今後大きく伸びる人だろう。

○発想がユニークで物の見方が常識的でないところがいい。言葉の扱いが独自で、新しい世界を作ろうとする意欲がみえる。これからもっと多くの表現を見出だしてゆくだろう。

永田恵美推薦

○旧仮名で作歌しているにもかかわらず、詠みぶりは軽やかで、発想の斬新さには瞠目すべきものがある。病を詠んだ作品からは哀切さと諦念が感受される。

○病と闘う日々にありながら、毎日の生活を愛情を込めて詠んでいる。そして、生活の中で発見が独自の比喩を用いて、印象深く詠まれている。

○癌の再発のおそれがあり、その不安に揺れ動く心情を詠んだ

ものに佳品が多かった。しかし、抒情の質は湿潤ではなく、むしろ軽快でパワフルである。

内藤丈子推薦

○産土の若狭を詠んだ歌はたゆたゆと胸をひたし、老母を詠んだ歌はあたたかく胸に響いた。

○生まれ育った土地を愛し、その歴史をも詠み込む。母の老いを見つめる歌はしみじみとして心に染みる。

○故郷福井の季節を詠んで、魅力的である。両親の歌は、愛情にあふれていて心打たれる。

○植物や風土、その土地の食べ物の歌は、その地の香りや味を感じて。家族を詠んだ歌にも詩情がある。

石田信夫推薦

○社会を見つめる鋭い視線や、懸命に生きる無名人への共感に愛情が溢れる。老母を看る歌とともに、作者の信念が貫く潔さ

が心地よい。○社会へ向けた目は鋭くあたたかい。その目で捉えたことさらに印象的な比喩をもって提示する。「ラジオ屋」の歌の快活なリズムも魅力的である。

半身像疎林のごとく展示されそれぞれの眼が見つむる虚空
まとひたる苔もろともにくすの木は肌のかけらをさくつと離す
午前五時四十五分の直角が見ゆクロノスの腰掛けとして
夜明け前エアーズロックを思はせて毛布を被る夫の鯨脈
春キャベツ剥いては食べて十日目の芯にあまたの花が咲いてる
ふかぶかと昼の空あり犬四手の新芽がそよぐ操るやうに

永田 恵美

「二の巻にあるべし」で終はる「虫めづる姫君」の第二話考へてあるケトルから湯気立ちあがり小人らがあわてふためくごとき音たつ夏陽あたるフロントガラスが眩しくて過去の悪事を白状しさうだ既視感ハスマホの弊害言ふテレビ昔は君も非難されたよ七月のゲリラ豪雨の昼空を音無くノアの箱舟がゆく夏空にトランプペットの雲浮かび蟬の合唱に鳴るファンファーレ祝日が名前を変へて日を変へてバス停でわたしを戸惑はせてる

内藤 丈子

産道のやうな夕暮れ われのみを受け皿として母は老いゆく
雪のこぼれ澄める菘の畑ゆき初明かりといふいのち浴びたり
潮鳴りの凍る越前海岸に香りふるはせ雪中花咲く
くねくねと水蛭くねるる越前の海をへばけ縄漁の舟ゆく
寒シジミ採れたて入りのラーメンを若狭の湖畔で食べる正月
雪のなか掘りたる蕪のおいしさよ越前の冬がほろほるとけて
蟹汁の匂ふ厨に春立ちてほうと明るむ母の横顔

石田 信夫*

クリップで留めたるメモを眺めつつ母が記憶をめくる昼なり
あのタクトさばきはカラヤン「英雄」ぞ道に旗振る老警備員
鶉色にハナミズキ咲けば見慣れたるこの町筋も悪くはあらず
羽佐利山に熊は何頭生きいるや一寸鈴を振りつつ登る
山合の町より消えてはるかなる駄菓子屋、下駄屋、綿屋、豆腐屋